



TITLE:

花山だより

AUTHOR(S):

星見山人

CITATION:

星見山人. 花山だより. 天界 1934, 14(155): 192-192

ISSUE DATE:

1934-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165490>

RIGHT:

花 山 だ よ り

昨年12月28日頃から10日間許り、花山の人々も大部分歸省して、僅か2.3人が留守居をしたのですが、山本先生は大變御精勤で、元旦はもとより、正月の休みにも殆んど、ずつと山へ來られてゐました。

今年は雪が多いと言ふ話でしたが實際多く、先月の13日が初雪で今月(1月)に入つてからも10日に降つたのが數日消えず、16日のが未だ消えない内に19日に大雪となり、花山の定期 Bus がオトマル谷で立往生して了つた程です。併し山の連中はなかなか元氣で、小山先生のスキーを借りて、大いに滑つたり轉んだり、汗みどろになつてスキーの練習をしました。此の時の雪は未だに解けず、自働車の轍の跡はカンカンに凍つて、山人は之に滑つて宙返へりをした程です。其の後も屢々小雪があり、遂に24日夕刻、宿舍便所の水洗用鐵管が氷結のため破裂して、洪水となり、大騒ぎを演じました。

1月25日に本年最初の談話會が圖書室で開かれました。此の日は山本先生が變光星の各型種の分布の割合に就いての御研究を發表されました。

我東亞天文協會事務室は、昨年暮から花山へ移轉を開始してゐましたが、22日を以てすっかり移轉完了し、目下整理に大多忙の様子です。(1934, 1, 31.) 星見山人

之れは不思議な因縁！

本會長山本一清博士の御宅の眞正面に當る京都市寺町今出川下る西入眞如堂突抜町百三十五番地の一へ今回京都教育會により左記の史蹟が標示せられた。

『贈從五位 山本鴻堂之舊邸』

山本鴻堂、名は復一、本草家贈正五位山本亡羊の孫なり。幼にして本草學を修め、又弘く和漢の史籍を讀明し、詩文に長ず。嘉永六年黑艦浦賀に來航するや、復一痛く之を憂ひ、筆硯を捨て、祖父の門下生なる田中河内介、家里新太郎等と事を謀り、四方の有志等と深く交り、名聲漸く同志間に聞ゆ。慶應三年末、山中靜逸復一が舊邸に來訪し、岩倉公の内旨を傳ふ。復一、公を奸物なりと稱し、山中は岩倉公を不出世の豪傑なり公に非ざれば到底維新の大事業は出來ぬと論じ、遂に復一は山中と同伴して岩倉邸に赴き、公に謁し時事談を聽し、初めて公の大人物たるを識り、其日より岩倉邸に止宿す。當時岩倉邸に出入せる志士は玉松眞弘北島秀朝香川敬三山中靜逸宇田淵原保太郎大橋愼三三宮義胤樹下茂國藤井九成等數名なり。慶應三年十二月王政復古の大令下降して、新政府未だ確立せず、百般の事皆公の門より出づ。當時の布告布達命令の多くは

復一の起草になるものとす。斯くして戊辰の役起るに及び朝廷軍資金に乏しく、公は復一及宇田淵山中靜逸等をして富豪を説諭し、金穀調達の事に盡力せしむ。時に復一近江知恩院其他各藩より正金を募り、是を岩倉邸に輸送し紙幣と引換へ、正金を會計局に廻はし、軍資を供給し、大に功績を擧ぐ。次いで明治四年十一月岩倉公に隨ひ歐米巡遊の途に就き、以後復一は公と進退を共にし、大政輔弼の事業に心碎す。公の薨去後は孝明天皇御事蹟調査掛附屬となり。明治二十七年五月職を辭し、京都に歸り、専ら明治中興史逸事を蒐集するに努め、晩年は愛宕神社の社司となり、明治四十五年一月維新史料編纂會委員となりしが、同年四月病に罹り、京都に歸り、療養中其効なく、同七月四日病歿す。年七十三。因みに鴻堂未亡人及嗣子默夫氏は中筋石藥師下るに現住、默夫性狷介未だ娶らず。只管老親に仕へ、余暇鴻堂偉業の整理に従ふ。隱者の感あり。